

# 平治物語の絵巻の絵詞と平治物語

高橋 貞一

平治物語絵巻には簡略な絵詞がある。ここにその文を平治物語と比較してみようと思う。これまで平治物語絵巻についての解説は多いが平治物語との比較検討されたものはないようである。

## 一、三條殿夜討

九日丑剋ばかりに信賴卿數百騎の軍兵を相具て院の御所三條殿へ参て信賴をうたるへきよし承れば東國の方へまかり候なむす年来ちかくめしつかはれて御いとをしみも人にすきて候つるに君をわかれまいらせて忽に都をいて候なん事こそ心うく候へと申せば上皇こはいかなる事そ何ものゝ信賴をうつべきそと仰ありけるを承もはてすやがて兵ども御車をよす信賴とくく御車にめすへし今は御所に火をかけよと下知しければ御心ならず御車にめしてけり上西門院はもとよりのせまいらせたりけり師仲卿そ御車をはよせける信賴義朝佐渡式部太夫重成檢非違使源光基前檢非違使季実等御車を打かこみて大内へわたしたてまつる一本御書所にをしこめまいらせて季成光基

守護しまいらせけり御所には軍兵四方をうちふさき火を放てもれいつるものを射ころし切ころすもしやたすかとて井にそおまきおち入ける上下の女房つほねの女のわらはへをめきさけひてはしりいてたふれふす馬にふまれ人にふまる浅猿ともいふはかりなし命を失ふもの数をしらす義朝謀反をおこして三條殿に夜打に入て火をさして院も煙中をいてさせ給はすといふものもあり大内へ御幸なりぬとものゝしりければ大殿関白殿よりはしめ奉て公卿殿上人をのく群参せらる馬車の馳ちかふをと雷のことし天にひき地にひく事おひたし

これは平治物語巻上の三條殿發向の事にあたる。平治物語金刀比羅宮本によれば、(岩波古典大系本一九四頁)

九日の子の剋信賴義朝數百騎にて院の御所三條殿へ押寄、信賴御所へ参て申されけるは、信賴を討べき者あるよし告知する者候間、東國の方へ落行ばやと存候、幼少より御不敏を蒙り候つるに、都の中を出候はむ事、行空も覺候まじと申されければ、上皇、何者か汝をうたんと申ぞとてあきれさせ給へる御様なり。伏見の源中納言師

仲卿御車をさしよせてめさるべき由申ば信頼、まことに御不便なりとの御気色にて候は、とくくめさるべく候と申間、上皇取あへさせ給ぬ御有様にて御車にめされけり。佐渡式部大夫重成御車の前後を守護し奉り、大内へ御幸なしまいらせて、一品の御書所に打籠たてまつる。

信頼義朝御所に火をかけて、防者あらば討取との給ひ馳ぬ。四面に打立て、御所に火をかけたれば、上下の女房達あはてさはぎ出られけるを、散々に射ければ、火をのがるる者は矢をのがれず、矢をのがるる者は火をのがれず、矢をまぬかれんとする者はゐにこそおほく入けり

(中略)

明れば十日、太政大臣左右大臣、内大臣以下公卿殿上人参内して僉議あり。

とある。傍線を附した所は平治物語によつたと認むべきである。絵詞の傍線を附した所は平治物語と異なる所である。

陽明文庫本(巻上、巻中、巻下は九條家本)によれば、

新古典大系本(一五四頁)には、

九日夜、丑の刻に……信頼馬にのりながら南の庭にうちたち、大音あげて申けるは、此年来、人にすぐれて御いとをしみをかうぶりて候つるに、……東國かたへこそまかり下候へと申せば、上皇大いにおどろかせ給て、さればとよ何者が信頼をうしなふべかるらんとおほせもは

てぬに、つはものども、御くるまをさしよせて、いそぎ御くるまにめさるべきよし、あらゝかに申て、はやく御所に火をかけよと声々にぞ申ける。上皇あはてて御くるまにたてまつる。御妹の上西門院も一御所におはしましける、同御くるまにたてまつる。信頼義朝、光保光基重成季実御車の前後左右をうちかこみて大内へ入まいらせ一品御書所におしこめたてまつる。重成季実ちかう候て君を守護し奉る。(中略)

三條殿のありさま……兵どもうちかこみ所より火をかけたれば、……射伏切殺しけり……井の中へこそとび入けれ。(中略)

さるほどに大殿関白殿大内へはせまいらせ給。……馬車のはせちがう音、天をひゞかし地をうごかす、万人あはてたるさまなり。

とある。傍線を附した如く金刀比羅宮本と異りこの陽明文庫本が絵詞の基となつたと認むべきである。

## 二、信西最後

同寅刻に信西か姉小路西洞院の宿所追捕して火を放つこの三四年ハ兵杖禁制なとありて天下静謐なりつるに、はかにかゝる乱出来て禁中も京中も軍兵みち／＼たりとはいかになりぬる事にかと貴賤かなしみあへり

信西ハ南家博士なりけるか高階経敏か子になりたりけれとも大業もとけさりければ儒官にもならず非重代なりとて弁官にもなされさりしかとも子ともハ三事をかね七弁にならひ中少將をけかし上達部にいたる然れとも今は露命なをあやうし十日ひそかに都を逃出して奈良方へおもむくと聞しか伊賀國境北の山中にて自害してほりうつまれたりけるを出雲前司光保か郎等尋行て掘出して首を切て持来

十六日信西か首光保か神藏岡の家へ持来よし申せは信頼惟方同車して行向て実檢す

十七日源判官資経以下の官人三條河原にて信西か首をうけ取て大路をわたし西獄門のあふちの木にかく是を見る人夢かと思けるさせる朝敵にもあらず獄門にかけらるゝほとん罪科何事哉前世の宿業歟今生の現報歟無慙ともいふはかりなし

とある。金刀比羅宮本には、

その日の五剋に信西入道が姉小路西洞院の宿所へ押よせて火をかけたれば、……保元以後は世も鎮に治て……今は物具したる兵ども京中に充滿せり、こはいかに成ぬる事どもぞやとさはぎあへり。

(大系本一九五頁)

彼信西入道と申は、南家の博士、長門守高階経俊が猶

子也。大業も遂ず儒官にもいらず、非重代なりとて弁官にもなされず、日向守通憲とて何となく御前にて召仕はれけるが、出家の志ありし事は……やがて出家してんげり。子息ども或は中少將に至り、或は七弁に相並ばせ、ゆゝしかりしかば、墨染の袖に身をやつし、今は露の命さへのがれがたし。(中略)

舍人成澤を召具し、南都の方へ落られけるが、伊賀と山城の境田原が奥へぞ入給ふ。石堂山の後志賀樂の峯を遙にわけ入りて天変あり、……穴を深くほりて、四方に板を立並、入道を入たてまつり、……其後大なる竹のよを通して入道の口にあて、もとどりを具してほりうづむ。

(中略)

出雲前司光泰、郎等五十余騎にて、信西が跡を尋てきたりけるに……ほり起てみれば、いまだ目もはたらき息もかよひけるを、首を取てぞ帰ける。出雲前司光泰、信頼に此由申せば、同十四日別当惟方同車して、光泰の宿所神楽岡へ行向て実檢、必定なれば、十五日には大路をわたし、獄門に懸らるべしと定めらる。京中の上下河原に市をなし……朝敵にもあらざれば、勅定にもあらず、首を獄門に懸らるること前世の宿業今生の現報かとぞ人申ける。

傍線を附した所は、絵詞と類する語である。これによつ

ても絵詞は平治物語によつて成立したことが明らかである。次に又陽明文庫本をみると、金刀比羅宮本と異なる所がある。

同夜の寅の刻に、信西が姉小路西洞院なる宿所を追捕してやきはらふ。……此三四年は現世安樂に、都鄙鎮をわすれ、歓娛遊宴して、上下屋を並しに、……こはいかになりぬる世中ぞとなげかぬ者もなかりけり。(中略)

そもそも少納言入道信西は、南家博士なりけるが、高階のつねとしか子になりて、高家に入たりしかども、儒官にもつらならず、その家にもあらざれば弁官にもならず、日向前司通憲とて鳥羽院にぞめされける。(中略)されども今は、三事の職を兼帯し、夕郎の貫首を経、その子どもは、七弁の中に加り、上達部に至、中少弁をぞけがしける。(中略)

此禪門は……侍四人ばかりめしぐして、大和路を下に宇治にかゝりて、田原が奥、大道寺といふ我所領につきにけり。

(中略)

穴をほり、めぐりを板をたててこそ埋められけれ。：

…(中略)

同十四日、光保が郎等男、木幡なる所に用ありてまかりけるほどに……此おとこを前に立て、田原の奥にゆきてみれば、土をあたらしく撥ね上たる所あり。すなはち

掘りてみれば、自害して被理たる死骸あり。その首をきりて、奉りけるなり。

同十七日、源判官季経以下の検非違使、大炊御門河原にて信西が首をうけ取、大路を渡、東の獄門のまえなる櫓の木にぞかけたりける。(中略)年ひさしげなる僧あり。此首をみて……申けるは、……朝敵にあらざる人の首を渡りかけたる前例やある、罪科はなにごとぞや、先世の宿業、当時の現報、まこと、はかりかたき事かなと……くどきて泣きければ、これを聞くとともに、袖をしぼらぬはなかりけり。

この條は金刀比羅宮本に近く、陽明文庫本よりの異文は少い。

### 三、六波羅行幸

主上又六波羅へ行幸なる女房の姿をかりて御かづらめしかさなりたる御衣をたてまつる北陣に御車をまうけてのせたてまつる中宮もおはします朔平門をかためたる武士どもとゝめ申せば惟方卿すゝみいてゝ女房のいてらるゝ也おほつかなくおもふへからすとの給ひけれども弓のはすにて御車の簾をかゝけて火をふりあけてみたまつるに女房ともにておはしましければいたしたてまつるる神靈宝劔も御車にいれられにけり玄上鈴鹿は成頼これ

をとり出てわたされぬ内侍所をハかきいたしたてまつる  
覧としけるを正清か良等みつけてをひとゝめたてまつる  
經宗惟方直衣にかしははさみにて御共に候はるかねて用  
意したる事なれば頼盛重盛已下の兵の数百騎御むかへに  
まいりたり其時こそたのもしく思食されけれ

廿七日辰剋美福門院八條殿よりおなしく六波羅へ御幸  
ならせたまふ

六波羅へ行幸すてになりたり御方に志あらん武士并公  
卿殿上人いそぎ可参と藏人右少弁成頼承りて被申ければ  
大殿関白殿太政大臣左右大臣内大臣已下の公卿、中宮亮  
信能頭中将実國已下殿上人各被馳参

越後中将成親、信頼卿の耳にささやきけるは夜部六波  
羅へ行幸なりたりとて、六波羅にはいとゝ軍兵まいりか  
さなるよいひければよもさる事あらしとてはしりまは  
りて見たてまつれば主上中宮もおはしまさす上皇女院も  
見えさせ給はす新大納言別當もなかりければあさましと  
もいふはかりなしぬけゝとしてこのよし不可有披露と  
わなゝきこゑにそいひけるこの人々にはかられにけりや  
すからぬものかなとて護法などの様にをとりあかりく  
らゝしけれともいたしきのみひゝきてそのかひなし  
とある。

金刀比羅宮本には、

主上も六波羅へ行幸なる。人めを忍び給はん御為に、  
女房の御すがたにならせ給、御車にめされければ、中宮  
もめされけり、……藻壁門より行幸なれば……金子平山  
固めたり。十郎家忠、いかなる御車候ぞと申せば、別当  
惟方が有を、北野まうでの御為、上臈女房達出させ給ふ  
ぞ、別の子細はなしとの給へば、金子もなをもあやしく  
おもひ弓のはずにて御車の簾をざつとかき上、續松ふり  
入てみまいらせけるに、……かさねたる御衣に御かつら  
めされけり。中宮も渡らせ給ふ。紀の二位もさぶらはれ  
けり。うつくしき女房達にてわたらせ給へば、……通し  
まいらせけり。

(中略)

左衛門佐重盛、三河守頼盛、三百余騎にて、土御門東洞  
院へ参会、御車の前後を守護して六波羅へ行幸なしたて  
まつる。……右少弁成頼馳めぐり、六波羅皇居に成ぬ、  
志しおもひまいらせ給はむ人々参べしと披露せられけれ  
ば、大殿、関白、太政大臣、左右大臣、内大臣以下、公  
卿殿上人、我も我もと馳参ば、馬車去あへず。

(中略)

越後中将参内して、行幸は六波羅へ、御幸は仁和寺へ  
と承はいかにと申ければ、信頼卿、よもさは候はじ……

がはと起はしりめぐりみまいらせられけれども、主上もわたらせ給はず、上皇もみえさせ給はず。別當もなし、新大納言も見えず。……護法などの付たるやうに、をどり上りくゝ忿られけれ共、ふとりせめたる大のおとこにて、板敷のみぞひゞきける。をどり出したる事もなし。此事披露候などの給ひけるは、無下にいひ甲斐なくぞ覺えける。

右の傍線を附した如く、大略金刀比羅宮本のごとき文によったことは、明白である。

次に陽明文庫本には、

主上も北の陣に御くるまを立て、女房のかざりをめして、かさなれる御衣をたてまつる。玄象鈴鹿大床子印鑑時の札、みなくゝわたししたてまつれと御沙汰ありしかども、さのみはわなはず、内侍所の御唐櫃も大床までかき出しまいらせけるを、鎌田兵衛が郎等見つけまいらせてとめたてまつる。主上の御くるま遣出すに、兵どもあやしみたてまつる。別当惟方、それは女房の出らるる車ぞ、おほつかなく思べからず、とのたまへ共、兵どもなをあやしく思て、……火をふり上させ、弓の筈をもって御くるまの簾をかきあげて見まいらせければ、……女房に見えさせ給ければ、事ゆへなく通したてまつりけり。……

經宗惟方は、直衣に柏夾にて供奉しけり。(中略)

六波羅より左衛門佐重盛、三河守頼盛、常陸守教盛、その勢三百騎ばかりにて、土御門東の洞院にて参合、さてこそ君も安堵の御心つかせましゝけれ。(中略)

藏人右少弁成頼をもつて、六波羅皇居になりぬ。朝敵とならじとおもはんとがらは、みなくゝ馳せまいれとふれさせければ、大殿関白殿太政大臣、左右大臣以下、公卿殿上人、みなくゝはせまひられけり。

(中略)

廿七日の明ぼのに、越後中将成親、ちかづきて、いかにかくてはおはするぞ……とつげければ、よもさはあらじものを、いそぎおきあがつて……走りかへり、中将の耳にさゝやきて、かまへて此事披露し給なといひければ、成親、世におかしげにて、義朝以下の武士共みな存知して候ものをとこたへければ、信頼、出ぬかれぬと云て、大の男の肥えふとりたるが、踊上くゝしけれども、板敷のひゞきたるばかりにて、踊出したる事もなしとある。傍線を附した所は絵詞と類する語である。以上によりて絵詞は、金刀比羅宮本と陽明文庫本によりて成立したと認むべきであろう。絵詞に、

廿七日辰剋美福門院八條殿よりおなじく六波羅へ御幸ならせ給ふ

とある語は、平治物語にはなく、他の史料によったもので

あろうか。

以上によつて絵詞は金刀比羅宮本、陽明文庫本の如き平治物語を参考として成立したものと認むべきである。金刀比羅宮本、陽明文庫本の成立年代が不明であるが、絵詞は絵巻の成立が鎌倉中期頃とすれば、両本の成立はそれ以前といふべきであらうか。但し絵巻の成立は或は鎌倉末期かも知れないといふ推定もある（拙著金刀比羅宮本保元平治物語とその流伝の補遺である）

百練抄に、平治元年十二月廿九日に、「行幸美福門院八條亭、清盛朝臣已下着甲冑、供奉御輿前後」とあり、美福門院に災難がかかる様にも見とられないので疑問がある。